山口大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要第７号（1996. 3）

眠りと目覚めについてのモノローグ

－シュタイナー教育の基本概念を理解するために－

實松宣夫*

Monolog von Schlafen und Wachen

－Zu Verstehen zweier Grundbegriffe der Waldorfpädagogik－

Nobuo SANEMATSU*

(Received November 1995)

キーワード：シュタイナー教育、眠りと目覚め、人智学

はじめに

「眠りと目覚め」は平凡な日常の事実である。それは平明であたりまえの事実、健康な生体には当然のリズムであり、ことさらに考察するほどの問題ではないようである。

しかし、この両概念は「呼吸」と共に、シュタイナー教育の秘密を解く鍵の一つである。シュタイナー教育のあの独特な構成は、眠りと目覚めについての事実理解から成立していると言っても過言ではない。[3]

私達に一般的な理解では、眠りとは昼の間の知覚、感情、意欲などが全て消えている時間である。昼の間活動していた自我や心性は眠りの間は活動を止めている。そして何故であるかは不明なのだが眠りの後では身心が活性化されている。眠りは夢の分析により多少は知られるようになったものの、未だその内実はよくわからない。よくわからなくても、別にかまわないものである。あらためて、眠りとは何かと考えてみても、それが自身の生活における事実でありながらよくわからない。眠りは無意識の世界なのである。

生理学の書物を見ても、眠りにともなう生体の機能変化はわかるが、眠りの体験内容については何も伝えてくれない。生理学での眠りの説明は、丁度、胃カメラで自身の胃を見た時のような感情を生じさせる。そこにあるものが自身の胃であると言われても、どうにもなじめない。いぶかしさが残るのである。それは自身の体験そのものではない。自身の体験にある「生きた」実感がない。それでありながら、自分の胃ではない、と否定することもできないのである。

※ 学校教育講座

繰り返しとなるが、眠りは意識の及ばない世界である。だから眠りの体験内容について何を語っても、その言明は実証できないし反証もできない。今日の科学では相手にすることが難しい。だからシュタイナー人智学におけるような眠りの理解は、奇妙ではあるがおもしろい一つの見方であると処理されるかもしれない。否、おもしろいが奇妙であるとして、相手にされないかも知れない。しかし、筆者は今ようやく実念論（精神実在論・概念実在論）のおもしろさを知るようになった。近代科学が実念論を排除しなければならなかった理由も理解できるようになった。ところで、シュタイナー教育とは、実に、実念論の真実さを教育の場で実証しようとする試みなのである。

上で言う「実証」は、近代科学で言う「実証」とは異なる。前者は人々の共感的承認（了解・納得）に基づくものであり、後者で目指す単なる事実の指摘（解明）ではない。実念論は西洋の歴史を通して強力な支配権力を行使してきた。だから近代科学は実念論からの離脱、人間的知性の独立宣言ということになった。その意義は否定できないのであるが、しかし実念論はそれによって消滅したのではない。宗教の教義を見れば明白であるが、実念論は今なお人々の心を捉えている。ただ、宗教の教義を解説する人々が、自分の語るものが、過去には実念論として語られたものであると、正直に語らなくなっている。教義が近代科学の方法を衣として提出されているのである。精神（霊）という目に見えないものが実在することについて、正面からそれを主張する姿勢は宗教界でも弱い。その結果なのであろう。例えば科学者は、自身はその実在を信仰していても、学問の場ではそれを問題としない。信仰と科学的方法とは分離したままであることに疑問を感じないのである。実念論は現在、そのような形式の下に無視されながら生き続けている。

しかし、シュタイナー人智学ならびにシュタイナー教育では、実念論を正常な姿で復活させようと努力している。この復活（上の用語で言えば「実証」）は、例えばこの教育に従事する教師の生き方の中に、体現されて指示されているのである。その教師たちを見ていると、単なる「論」の正当さを主張するのではなく、精神（霊）の実在することを自身の人生において例示しようと努めている。これは実念論のために生きる、ということではない。当人は「論のために生きる」のでなく、自身の自由を楽しんでいる。しかしそうでありながら、主体的で自由な（だから楽しい）選択や行為が、つまり生活がそのまま、実在する精神（霊）に基づく人生となっているのである。

シュタイナー人智学では、眠りとは実在する精神（霊）に個々人が出会い、それと融合する体験である。後に述べるが、眠りは、超感覚的な世界に存在するもの（伝統的な用語では天使たち）と触れ合う時間なのである。シュタイナー教育はこの超感覚的な存在者（天上の存在者）と共に、地上に生きる人間の人生を考えようとする。だから子どもの教育は宇宙論との関係において構想され、実施されているのである。シュタイナー教育に特有な、奇妙とさえ見える数多くの用語は全て、実念論的宇宙論による教育の真実さを世間に知ってもらうための理解の枠組作りと言うことができる。「眠りと目覚め」は、そうした理解の枠組の骨格となるものの一つなのである。

例えば、シュタイナー教育にはじめて触れた人は、「忘れる」ことが重要視されていることに驚く。子どもは教師から学んだことを一度忘れて、後に再び思い出す時、その子の理解は、単なる知識ではなく、その子の身についたもの、「能力」と呼んでよいものに変化するとするのである。[(1)]この指摘を、自身の体験から肯定する人は多い。そして受験勉強に焦点化されている今日の学校で、忘れること即ち罪悪とする思想が支配的であることに気付く。本来の教育は、忘れることもサイクルの中に入れた全体において構想されるべ

きではないかと考えるのである。ところでこの忘却とは「眠り」に他ならない。そして、想起とは眠りからの「目覚め」なのである。シュタイナー教育では、子どもの身についた能力の形成を、眠りと目覚めのリズムの中で実現しようとしている。知育にも、眠りの視点が必要だとするのである。

上のように忘却と想起を「眠りと目覚め」と呼ぶ時、この眠りと目覚めは文字通りのもの（夜ふとんに入って意識を失う眠り、朝、目がさめて再び我を取り戻す目覚め）とは用語の指示内容に違いがあると言える。しかし、ふとんの中での眠りも、目覚めの状態にある忘却（例えば、会話の中途で適切な言語がどうしても見つからない場合）も、シュタイナー人智学では共に、その本質は同一である。だから、眠りは忘却という形式で、昼の間の意識的活動の中にもあるのである。さらに、死と誕生という人生の大問題についても、人智学ではそれが眠りと目覚めであるとするのである。死とは眠りであり、誕生とは目覚めなのである。

以上のことから明白であるように、眠りと目覚めには三つの位相がある。つまり私達に一番理解しやすい夜の眠りと朝の目覚め、そして忘却という名前の眠りと想起という名前の目覚め、さらに死という名前の眠りと誕生という名前の目覚めである。これはシュタイナー人智学で言う人間の構成要因（「肉体」「エーテル体」「アストラル体」「自我」）における眠りと目覚めの現象様式の違いによる。「自我」と「アストラル体」の間の関係が分離するのが忘却である。「アストラル体」と「エーテル体」の間の関係が分離するのが眠りである。そして、「エーテル体」と「肉体」の間が分離するのが死なのである。それぞれの構成要因の間が分離でなく、結合であれば、それは想起、目覚め、誕生である。分離とか結合の語は機械的で図式的な理解を生じやすい。しかしそうした理解は誤りである。シュタイナー人智学は、形式論理学を思考の尺度とする限り、逆接的とか矛盾的とかの形容しかできない世界である。この人智学の世界を図式的な説明で解説し尽くすことはできない。だから筆者による上の説明は一応の理解のための便宜である。（しかし確かに、私達の意識内の事実としては、忘却と眠り（そして死さえも）が同一のものによって貫かれているのを承認するものがある。）

眠りと目覚めを子どもの教育との関連で問題にするシュタイナー教育では、死と誕生の関連を除外した残り二つの関連が重要である。つまり、忘却と想起、夜の眠りと朝の目覚めである。一般の教育学が対象とするのは忘却と想起のみと言ってよい。夜の眠りと朝の目覚めはあまりに平明な事実であり問題とするに値しないとされる。目覚めた子どもにどう働きかけ、何を育てるかが教育だとされているのである。しかし、それはあまりに狭い。そして偏っている。夜の眠りと朝の目覚めは、それを生体の単なるリズムとみなしてしまうには、あまりに貴重な事実を内包している。それと言うのも、シュタイナー人智学では、眠りにおいて、人間は超感覚的存在と出会うとするからである。人間は死後、この超感覚的存在の住む世界（霊界）に至るのであるが、地上の生を営む間も、眠りにおいてはこの超感覚的存在と出会っているのである。実念論で言うところの精神（霊）は、この精神（霊）を否定する人においてさえ、眠りの世界ではそれが彼に人生を語りかけているとする。だから表面的に見れば、何の不思議もない眠りと目覚めのリズムは、シュタイナー教育では、それの正しいリズムを整えてやることが教師の仕事の主たる課題とされる程のものとなる。そしてこのリズムには、忘却と想起の問題を解く鍵も秘められているのである。

シュタイナー教育は、超感覚的な世界の存在者との関係で、子どもの教育を実施しようとすると述べた。その高次の世界から子どもの中に降りてきたものを、そして夜毎降りて

くるものを、子どもがしっかりと受けとめて、自身の経験として生きるように配慮するのである。人間は高次の世界から生まれ、その高次の世界に返るとするからである。生死を包む大きなリズムが、眠りと目覚めのより小さなリズムを包み、さらにより小さい忘却と想起のリズムに響いている。リズムとは、一つの現象が規則的に他の現象を呼び起こすことで成立するが、そのリズムを構成する一方は、常に他方に作用している。眠りと目覚めもそうしたリズムなのであり、相互依存的である。眠りには目覚めを促す力が作用しており、目覚めには眠りを促す力がある。超感覚的な存在者と共に眠りを生きた人は、感覚的な地上の生活にその力を持ち込み、昼間の意識的生活を生きた自我を、再び眠りの世界に持ち込むのである。シュタイナー教育とは、眠りの体験（超感覚的な存在者との共体験）を、目覚めの生活（地上の生活）に実現しようとするものであると言うこともできる。シュタイナー教育とは宇宙論的視点の下に、人間の使命を理解していく試みなのである。そうした人間理解から教授内容と方法が問われていく。しかもそれは教育一般、授業一般の問題に留まることなく、個々の子どもに即するまでに、具体的に問われていくのである。この一人の子どもは高次の霊的世界から、地上の生活に何を持ち込もうとしているのか、そのためには学校の教育と授業はどうあらねばならないのか、と。

以下では、眠りと目覚めについて、その内実を発達的視点の下にまとめてみたい。これは、端的に言って、子どもの眠りと目覚めは、大人の眠りと目覚めとは相違するという指摘である。もちろんそれによって、眠りは超感覚的な存在者との共体験であるとした上での指摘を、否定するのではない。しかし、超感覚的な存在者との共体験は、子どもの成長過程において自我意識が明瞭になるに比例し、逆に薄らいでいくのである。そのことにはそれなりの重要性はあるもの、危険性も含まれる。今日の人々がそれを当然とみなしているものの中には、シュタイナー人智学や教育学から見れば疑問点も多いのである。筆者は眠りと目覚めを発達的に考察してみることで、シュタイナー教育の特性がより明確になるのではないかと考えた。E．M．クラーニヒの論文を読んだこともきっかけの一つである。シュタイナーが眠りと目覚めの正しいリズム形成を、教育の課題としたことの意味を明らかにしてみたいのである。

Ⅰ．乳幼児の眠りと目覚め

◦新生児の体験

新生児の目覚めは、外界に対する最初の認知である。この認知は偉大な過程であると言ってよい。しかし新生児はほとんど眠りの中にある。一日の間に目覚めているのは約4時間。4ヵ月後で7～8時間。一才の誕生が来るころで11時間とされている。そして就学年令（7才頃）になると、12時間は起きていることができるようになる。そうした目覚め時間の延長の中で、乳幼児は次第により強く、外界と結合されていく。子どもが外界をより正確に捉えるようになると言われるこの過程には、大人の忘れてしまった固有な内容が生きている。この当時の子どもの心性に生じている過程を、スイスの詩人カール・シュピッテラーの言葉で紹介しよう。多くの人は記憶をさかのぼっても、0～1才の時にまで至ることはできない。しかしシュピッテラーはそれができるのである。

「心はまだよそよそしくて、地上に降りていない。……地上の新奇さが心を驚きで満たすのだ。『消え去ることなく、その像はいつも持続している。明るい光の下で、感覚の目覚めの下で。……奇妙な硬い夢にとって、それ、外にあるそのものは、何なのか』と」（⑦. S. 8）

これは大人の心性における外界との出会い体験ではない。シュピッテラーの語る体験によれば、それまでは動くもの、来ては去るものに慣れていたのに、今や、動かないものが持続し、それは「奇妙な硬い夢」のように感じられたと言うのである。その体験では、外界は像として明確化するまでに、まだ至っていないのである。シュピッテラーに発言を続けさせよう。

「私は誰かの腕に抱かれているのを感じていた。その人は私を、すでに以前から包んでいてくれた。それは私の母ではなかった。無数の光と空気が私の顔に当たった。私は眼をどちらかに向けた。すると私は信じられない程に高い、音のないものを見た。私はそれをはっきりと見たのであるが、捕らえられなかった。そして時々、似たような異常に高い何かが両側から急に現れた。私は音のない途方もないもののこの現れを、驚くことも不安を感じることもなく、見つめた。ただ、いぶかしく、そして少し恥ずかしかった。」(⑦. S. 12)

シュピッテラーが見た「異常に高い」「音のない途方もないもの」とは、道の両側に植えられていた樹木であった。しかし、そうした樹木の表象像は新生児ではまだ成立しない。表象像＝対象意識の成立は、それを言葉にして言うならば、例えばシュピッテラーの表現するような、「奇妙な硬い夢」の段階を、時間をかけて通過した後に、はじめて可能となるのである。誕生後一年間の、まだ言葉の出ない乳児の体験とは、このようなものである。

◦幼児期の特性（ファンタジー）

２才の誕生日が来る頃になると、言葉が操れるようになり、大人とのコミュニケーションも可能となって、乳児段階での「奇妙な硬い夢」は、次第に外界の事象である表象像に置き代えられる。しかしまだ、表象を成立させるより以前の力、言わば誕生以前の世界から地上生活に持ち込んでいる力＝「ファンタジー」が、強力なのである。例えば幼児の遊びでは、同一のものが家になったり船になったりする。幼児は同一である材料の方を見ないで、自分の創造したファンタジーの中で生きている。ファンタジーは大人になっても現れる。芸術的な創造の源泉を見れば、このことはよくわかる。しかし大人の生活では表象像がはるかに支配的であり、この像によって現実は客観的に措定される。一方、子ども、とりわけ幼児にあっては、ファンタジーによる世界の方が、より強い現実なのである。大人の表象に相当するものは、幼児ではまだ成立していない。それは固有の生命を持ち、豊かな創造性に満ちた可能性そのものである。幼児の心性は、言うならば固まりきらないこの可能性において、外界から離れたところで生きている。だから、幼児の自我は、「夢の中の自分」であり、言わば自分を夢において感じているのである。

目覚めるとは、心性が、外界との接触を直接的に意識することであり、自我が夢からさめて、外的な事物と関わることができるようになることである。

幼児は眠りと目覚めの中間状態を生きていると言うことができる。幼児の生活では、ファンタジーにおいて事物が理解され、事物の意味が創造されるため、夢の本質をなすものが、昼の意識状態の中にも現れているからである。しかし、幼児の心性は、この夢的性格を、どうして得たのであろうか。

◦幼児期の特性（相貌的理解）

人間は夢を見る時、その心性において生き生きした創造的な力が作用していることを、体験から知っている。その夢に登場する像は、昼の感覚世界で体験する表象よりも、はるかに強力である。表象像を影絵の如き月とすれば、夢の中のものは太陽であり、生命に満ちている。大人は夢の像を単なる主観内容と処理してしまうが、むしろこの像こそは、この夢の像の生きる世界こそは、一つの現実であるとみなすことができる。シュタイナー人

智学では、夢の世界は実在である。幼児がそこに生きているファンタジーの世界は、幼児にとっては虚構世界ではない。実在である。幼児の表象生活は無力な、単なる「像」にまでまだ弱体化されてはいない。そこでは生きた力を持つものが湧き出ている。そして、その中にはきわめて貴重な特質が現れているのである。この貴重な特質を、シュタイナー人智学では、超感覚的な高次の現実（霊界）に由来するものであると理解する。だから幼児とは、眠りの国の住人である高次の現実存在（霊）の作用する様式を、その名残を、見せてくれる人間なのである。

シュタイナー教育では、子どもに典型的に見られる「相貌的（physiognomisch）理解」を大切にする。これは例えば次のようなものである。ある4才児が人物の写った写真スタンドを見て、「堂々としている（stolz)」と言うとしよう。この写真スタンドが或る時、傾いているのを見た幼児は、「今は悲しいのだ（traurig)」と思う。また、コーヒーカップが伏せられていると、「疲れているのだ」と感じる……。このように全ての事物を、またその関係を、人間の表情との同一性において理解するのが相貌的理解である。これは広く知られている幼児の理解様式である。しかしそれは、発達段階の一時期に現れる下等な認知様式と評価されている。ところが、シュタイナー教育では、それは大切なものとして尊重され、子どもが相貌的理解を充分に体験できるように配慮する。理由は、それが子どもの生命状態に固有な特性だからである。この特性を無視して、対象の即事的認識である表象像の成立をいたずらに急ぐと、後年になって障害が生じると理解する。（これは早期知育教育の危険性を指摘するものでもある。幼児期の生命の特性が尊重されず、過重な知育を受けると、後年になって、生きるための根源力が枯れるとする。）

幼児は大人のように、事物に対する中性的な考察はできない。これを要求することは不当である。中性的考察ができないことは、下位の認知段階に低迷していることでは決してない。幼児はむしろ、ファンタジーに満ちた事物との関わりの中で、本質的な何かを体験しているのである。幼児が真直に立つ写真スタンドを見て、「堂々としている」、傾いている写真スタンドを見て、「悲しんでいる」と体験するのは、対象の認知と言うよりはむしろ、意志や感情による対象との融合のためである。幼児の相貌的理解は、対象認知の正確さで測定されるべきものではなく、対象との融合・一体化という活動の側面で理解されるべきものである。この相貌的理解と連動しているのが子どもの心性の基本的な特徴であるところの模倣衝動である。

◦幼児期の特性（模倣）

子ども、とりわけ幼児は、外界の諸事象を無意識のうちに模倣する。しかし模倣という言葉の語感から、それを静的なもの、受身的なものと理解してはならない。模倣は無意識のうちになされる、能動的な追体験なのである。子どもはそれと意識することなく、自身が見るもの聴くものと、内的に結合しようとしている。そのことにより、外界の諸事象は生き返ることになる。こうして生命化されたものは、大人から見ると笑うべき内容であるとしても、その際の生命化（創造行為）そのものは、大人が過去のものとした能動的な生産的活動なのである。子どもにとっては所与の世界はまだ生きている。子どもには所与のものを生命化して、それと一体化（没入）できる力が残っている。これが模倣衝動である。

シュタイナー教育では、幼児期の特性を「模倣による教育」であるとする。幼児とはとにかく、周囲の世界に融け込んで、それと一体化しないではおれない程に、徹底して没入できる人間なのである。この没入の原型は、乳児のあのひたむきな「まなざし」である。見つめられる大人の側をたじろがせるような没入＝模倣がそこには現れている。幼児にな

るとそれにさらに行動が加わる。やかましいと言いたくなる程に動きまわる幼児の根源にあるものは、探索的（認知的）関心と言うよりはむしろ、事物との一体化に向かう衝動である。この一体化のために、事物を知ることも必要となるのである。幼児期の教育の原則は、周囲世界を、幼児が模倣し、没入するに値するもの、してもよいもので満たすことである。幼児に模倣させたくないものは遠ざけるのである。この点ではルソー以来の消極的教育は積極的に評価されてよい。

模倣については、さらに、次の事に言及されなければならない。それは、子どもの模倣が事物の可視的形態、つまり視覚で捉えられるものを生命化するに留まらないことである。子どもは周囲世界の全て、眼に見えない雰囲気や言葉にされない気分をも、適格に把握してそれを模倣するということである。幼い子どもには、こうした本質直観の力がある。それは言わば超感覚的な能力である。現象学が解明しようとしている内容を、幼児は実行していると言うこともできる。ただ、残念なことには、自身が行使している能力について、幼児は適格な言葉で語ってはくれない。幼児のもつこの事象把握＝本質直観の能力は、強力な没入＝模倣と不可分である。幼児はこの没入によって、自分に語りかける大人の声の響きに浸る、またその人の身振り、態度、ふるまいを繰り返す。そうして、自分に向きあう人間の心性と融合しようとするのである。

幼児の特性であるこの没入は、事物や人間の本質に出会うことを志す大人が、意識的努力のはてに到達しようと努力している目標と言ってよい。ちなみに、シュタイナー人智学によれば、超感覚的な存在（霊）との出会いは、没入することの集中度を最大限に高めるような練習で可能となるとされている。もっともその際に没入される当のものは、自身の体験内容である。つまり霊との出会いには自分の体験を意識化しぬくことが要求されている。例えば次の文章である。

「この（超感覚的）世界において、意識的に生きるためには、次のような心性の衝動が必要である。つまり、感覚的世界では（どうしても）超感覚的世界に生きている時のようには強く発展することのできない衝動→体験するものに没入する衝動、が必要である。人は自身の体験の中に浸り切らないといけない。この体験と一つになることができなければならない。その事が、自身を自身の本性の外にあると見つめ、別の本性の中にいると感じる程度にまで、できなければならない。（それができれば）自分の本性を他者の中に移すことで、他者での体験をすることが成立する。人がこうした転換能力を持たないならば、この人は超感覚的な世界の中で本質的なものは何も体験することはできない。理由は、体験というものは全て、次のような意識に導かれることに拠るからである。つまり、今や汝は、『この一定の様式』に変化している、だから汝は、汝の本性を『この様式』に変化させたところのある存在と、生き生きと、共にいるのである、という意識。この自己変化、他者の本性へのこの感情移入、これが超感覚的世界における生である。」(④. S. 30)

シュタイナーによれば、自分が今の自分であるのは他者（自分を「この様式」に変化させたところの存在）によって変化させられたためである。ところが、この他者に対して人間は感情移入をすることにより、この他者を自分において感じることができるとする。しかし自他のこの関係は、上に見てきた幼児の模倣衝動において実現されているものに他ならない。それと言うのも幼児の心性においては、実に、超感覚的世界に生きるもの（他者）が作用し続けているからである。このことは、幼児の目覚めに、本来的には霊的世界に妥当する心的生が現れているということである。幼児の知覚には、霊的世界から持続している力が現れているのである。幼児は目覚めの時間の中でも、誕生以前の超感覚的な生活か

らの作用を経験しているのである。

◦幼児の眠りと身体形成

シュタイナー人智学では、幼児の心性には霊的と呼んでよい高次の現実がまだ残存しているとする。大人が、深い眠りの体験においてはじめて出会うものが、幼児では目覚めの生活の中にも現れているのである。幼児は言わば「目を開きながら眠っている」状態にあるのだ。そのことは決して否定的に評価されるものではない。上に見てきた幼児期の特徴である相貌的知覚や模倣衝動はこの意識状態において生じるのである。しかし、そうした幼児期の特徴は5～6才頃になるとかなり消える。シュタイナー教育ではそれを、子どもが超感覚的な霊的世界から地上に降り立ったためであるとする。地上に降り立ち、子どもが文字どおり「地上の子ども」となるのは7才頃である。だから子どもは「7才までは夢の中」[(8).]に生きている。幼児では眠りと目覚めがまだ大人におけるほど分離していない。両者は親しく、内的に移行し合っている。その融合状態から、時間をかけてゆっくりと両者が分離していく過程に幼児教育は参加するのである。

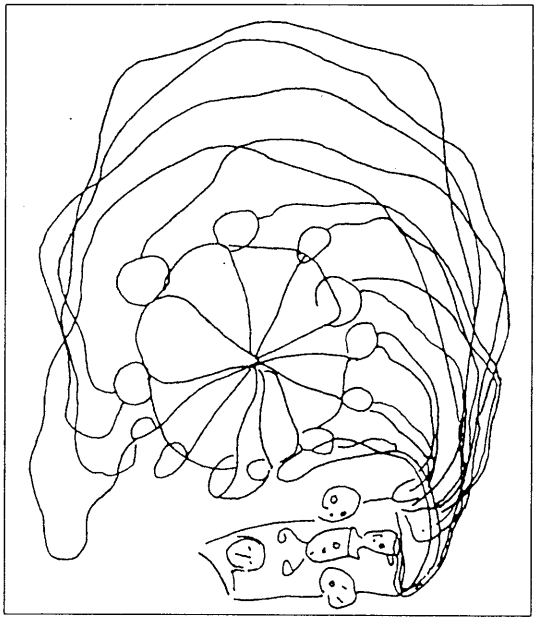
幼児教育は幼児の目覚めを促進することが課題であるのではない。むしろ幼児の眠りを保証することに課題がある。教師は眠りにおける超感覚的な高次存在者の働きに干渉してはならない。幼児は身心ともに長い時間、そして深く眠ることが必要なのである。幼児はこの眠りにおいて身体（諸器官）を形成していく。そしてまた、この眠りの中から自分を投げ出すあの没入、他者との内的共生の姿であるあの無邪気な献身、模倣衝動を取り出すことができるのである。

幼児の眠りは、昼の目覚めの生があまりにも眠りの生と異なることからくる疲労によるものだと解釈することもできる。大人からすればとりとめもないことに、幼児は緊張して疲労する。昼の間のこの目覚めの体験を消化するには、どうしても長時間の眠りが必要である。そうした解釈に対して、シュタイナー人智学は少し異なる解釈を提出する。人智学によれば、幼児ではまだ人智学で言う「自我」と「アストラル体」は独立していない。それらは「エーテル体」と未分離の状態にある。だから、目覚めの時の体験は大人以上に身体に直接的に影響してしまうとするのである。昼の間の体験が幼児の身体に対して形成作用を及ぼすのである。これに対して、大人では「自我」と「アストラル体」は「エーテル体」から分離しているため、昼の体験はまず「自我」と「アストラル体」に作用し、「エーテル体」にはそれらを介して間接的に作用する。だから後に見るように、年令が進むにつれて、眠りにおける形成作用は、身体から心性に限定されるようになる。そして大人の眠りでは「自我」に対する形成が中心となる。眠りの中で「身体」が形成されるのは幼児期の特徴である。身体の形成には心の形成や自我の形成より以上の、強度の働きかけが必要であり、それだけに幼児には眠りが必要なのである。

クラーニヒはフォン・ハイデブラントが提出した3才児の絵を紹介している。それはこの子が眠っている時の様子、つまりこの子の見た夢を表現している。

ベッドの上で横になっているのは子ども自身である。周囲には何人かの「人」か「おもちゃ」があるようである。しかし何と言っても目を引くのは中心にある大きな円と、それと子ども自身を結ぶ線である。円は12の部分からできている。この絵についてクラーニヒは、大きな円は宇宙的形象のようであり、そこから出る線は宇宙的形象から流れ出る作用と言うか、宇宙的全体と絵を描いた幼児との関係を指示するもののようである、と述べている。[(4). S. 31)] 幼児は自分の体が宇宙の全体と結びついているのを見たのである。

シュタイナー人智学によれば、幼児の眠りとは、基本的にはこのようなものである。幼



④. S. 32より

児の身体やその諸器官はまだ形成の過程にある。肺、腎臓、脳、筋肉、骨格など、身体器官のどれを取り上げても、そこには強力な形成力が作用中である。これは、「形成力体」とも呼ばれる「エーテル体」が、この時期、身体器官の完成に従事しているためである。もし幼児が、自身の身体に生起していることを表現できるならば、その内容は上の絵のように、宇宙との関係を明示するものとなるはずだと理解するのである。ちなみに、宇宙的全体はシュタイナー人智学でも12の部分からなる。黄道12宮や時間の基数である。それらと対応する人間身体における12感覚、また「オカルト生理学」の諸内容などを見ると、大宇宙が人間の身体の形態として現れていることが語られている。人智学では、マクロコスモスに対応するミクロコスモスを人間の身体・心・霊性において、それぞれに指摘することができるのである。

シュタイナーは幼児の眠りについて次のように述べている。「私達は幼児として、多少の差はありますがよく眠ります。だから私達は、幼児としては、その後よりもはるかに強く、地上を超えるものの影響にさらされています。私達は次第により強く、地上の関係の中に入ることをはじめ、活動します。しかし子どもの時はまだ、私達の皮膚の内部にあるものは可塑的なのです。その後よりも強い形成が可能です。」(⑤. S. 32)

Ⅱ. 学童期の眠りと目覚め

◦学童期の特性

幼児の眠りは少しずつ大人の眠りに変化していく。大人の眠りと呼べるものが生じるのは後に見るように9才頃からであるが、子どもの多くはそれ以前の7才頃に就学し、幼児から学童に変わる。大人の眠りを見ていく前に、学童期（7～14才）の子どもの特性を整理しておこう。

乳幼児期の特徴であった身体の可塑的形成は年令と共に急速に減少する。丸っこい体がスマートな形に変形し、子ども身体は大人の縮小形に見えてくる。シュタイナー教育では7才という年令を一つの区切りとする。7才という年令よりも、正しくは、その頃に生じ

る乳歯の抜け代わり（永久歯の発生）を重要な指標とするのである。身体において最も堅い鉱物は歯である。その歯が変化するということは、それ以外のものの全てが、誕生以前から用意していた形態の変更を完了した証拠であるとするのである。誕生以前からの身体形成の力については、一般的に遺伝が語られている。だから、上に見たシュタイナー教育の理解は、遺伝の作用が７才頃に身体形成を終了するという主張である。遺伝についてより厳格に述べるならば、シュタイナー人智学では、遺伝は人間の身体形成にのみ使用される用語であり、７才頃にその作用を終了するとする。つまり、遺伝は人間の心の形成や霊性には関与しないものであり、７才以後は無力となるのである。だからいつ歯が抜けかわるかということは、子どもの発達している現実を理解する上で、とても大切なことになる。教師は子どもの口を開かせて、一本抜けた、あと一本だと記録を取ることになる。永久歯がそろった時、小さくても身体は完成するとするからである。その後の身体は成長し成熟していくものの、それまでのような変化（新しい形態の獲得）はないとする。

遺伝についてのシュタイナー人智学の理解も整理する必要があるがここで詳論することはできない。ただ上に見たことからでも私達が理解しているものと異なることが窺えよう。私達の理解では、遺伝はその作用結果を子どもの時期よりも、むしろ大人において明瞭にする。体質や気質と呼ばれる恒常的性質は、大人になって固定化してくるからである。しかしシュタイナー人智学では、そうした恒常的性質は、形成を終了した身体に付随して出現する現象であり、結果なのである。身体が心性のこのような現象形成を規定するのは、現在の進化段階にある今の人類の制約なのである。本来の人間の心性は身体に拘束されることはない。遺伝は身体を形成することに限定され、心性にまで関与することはないのである。しかし現在の人類ではまだそれ程に心性の力は強くなく、そのために遺伝の作用を受けてしまうという結果となっているとする。

シュタイナー教育では７才頃に子どもの身体ができあがるという理解は基本的である。そしてこれ以前と以後では、子どもに対する教育の効用は質的に異なるとする。７才以前の幼児期の教育は遺伝に関与し、干渉する教育である。遺伝に関与し、干渉するとは、身体形成を援助するということである。身体を形成するのは「エーテル体」であった。この「エーテル体」（宇宙的形成力）の作用が、７才頃を境として身体の形成から心性の形成へと、衣変えをするように変わるのである。だから学童の教育では、幼児期になかった心性形成が中心となる。

人間の心性は一般に、「思考」「感情」「意志」と三分される。学童期ではこの心性の三領域が活発に作用するようになるのであるが、詳しく見ていくと「感情・意志」的な作用から、「感情・思考」的作用が生じる。ひとしく「感情」に包まれていながらも、「思考」が次第に独立してくる。子どもは知的となり論理的に考えることができるようになる。意識的な思考や行為が可能となるのである。これは子どもの眠りから大人の眠りに移っていくということでもある。シュタイナー教育では、学童期の子どもに対しては、「感情」や「意志」に芸術的な働きかけをすることで、美的な感動体験をさせ、この体験を介して「思考」の目覚めを促すという方法を採用する。シュタイナー学校の特徴である「教育芸術」である。

「教育芸術」はとりわけ学童期の子どもに対する教育である。この時期の人間では、身体形成から離れた「エーテル体」が心性を豊かに形成する。学童では心の世界が発達するのである。これは例えば表象像の成立という点にその特徴を見ることができる。幼児を特徴づけたファンタジーや相貌的理解は弱まり、対象を「対象」と認知できる表象像が成立

してくる。もはや、街路樹を見てそれを見誤ることはない。ファンタジーや相貌的理解は、知的に目覚めた思考の中に出現しようとすることになる。この出現様式が美的と言われるものである。また、学童では表象生活が豊かになると共に、表象像の記憶が確かなものとして成立してくる。乳幼児では目から見えなくなったものが、なおも存続しているという理解は成立しない。見えなくなったものは、そのままなくなるのである。見えなくなったものの像が「表象」として成立するということは、とりもなおさず「記憶」の成立である。幼児にも記憶は成立している。しかし学童ではそれが著しく拡大し深化する。学童でも表象像＝記憶は、はじめは「具象的」である。その時、その所で、直接に目にするものでしか成立しない。そして次第に、具象的な表象像から、像を代表する機能が抽象化され、「一般的」な像（抽象的思考）ができるようになる。これは学童の使用する言語の高度化と対応している。学童は具象を離れた、純粋に機能的な、記号言語を駆使できるようになって大人になる。しかしそれには青年期を通じる長期にわたる発達の時間が必要である。

学童期とは子どもの心性に表象像＝記憶が成立し、見えない対象について思考を深めていくことができる時期である。そして、それらの事態は大人の目覚め（大人の意識状態への覚醒）に他ならない。学童には、眠りの世界にある無意識の世界から、それとは明確に違う昼の意識の世界が区別されてくる。昼の世界（大人の世界）の成り立ちが理解できるようになり、自身の中に他者とは区別される自身の自我が強く意識されてくる。「昼の世界を見ているのは自分自身である」とする目覚めた意識の成立である。

◦ルビコン川を渡る９才児

シュタイナー人智学によると、人間の「自我」は３才頃に一度目覚める。「目覚める」の語に代えて、誕生すると言ってもよい。それは、幼児が自分に向かって「私」という代名詞を使用できた時である。親が呼びかける「○○さん」という固有名詞をそのまま、オウム返しに自身に使用していた幼児が、明確に自身を「私」と呼べた時である。この時から反抗期と呼ばれる時期が生じることになる。しかし３才頃に生じた「自我」は、まだまだ周囲世界と一つであり、一つになろうと努めている。だから相貌的理解も成立するのであるが、そうした主客未分離の状態は、幼児が経験を重ねる中で、次第に分離してくる。「対象」とは異なる「自身＝私」が明白に意識化されてくるのである。この「自我」の誕生は、シュタイナーによってルビコン川を渡るシーザーに比較された程の大事件なのであるが、シュタイナー教育以外の世界では無視され続けてきている。

その理由は、眠りを外的に見つめている限り、子どもには何らの変化も認めることができないからであろう。子ども自身の体験においても、その時期に劇的な変化があることは意識されない。大人が自身の体験を内省しても思いあたるものがないのである。しかしシュタイナー教育を理解するには、学童期の半ば頃に生じる「自我」の意識化は重要である。シュタイナーは、子どもがこのルビコン川を渡るのは９才頃であるとする。[10]

この時期、子どもの中では表象がそれとして意識されるようになるのである。子どもにも、表象とは自身の頭の中のテレビに映っているものだと、何となくわかりはじめるのである。これは、対象を対象として認定できることであり、対象を意識的に操作できるようになることである。子どもはそれまでの、夢の中にいるかのような自他の一体感から抜け出て、自身と自身以外とを区別する力を持つのである。しかし、当の子どもには、今、ルビコン川を渡るのだという重大な決意や決定の自覚はない。ほとんど無意識のうちにこの川を渡り終えるのである。言わば眠りのうちに渡河する。しかし、後からふり返って見ると、その時以後は、以前とは異なる世界に生きていることが明白となるのである。ルビコ

ン川を渡ったシーザーが、それ以前の彼に戻れなかったように、子どもは以前の世界には戻れない。彼は一路、大人に向けて、大人となることに向けて、進まざるをえないのだ。子どもの「自我」は、これ以後、昼の目覚めの世界において、この世界の諸問題と取り組みながら、成長していかなければならない。シュタイナー教育では、子どもが自立をはじめるこの時期に、「家づくり」のエポック授業をすることが多い。家は、安心のできるくつろいだ内世界（家庭）と、社会的な関係下で仕事をしなければならない外世界とを区別するものである。子どもは家をつくることそのものを楽しんでいるとしても、教師はその活動の中に、自立する子どもの自我への激励を含めている。授業の中で家づくりをすることにより、自我という名前の家が、子どもの心中で作られていくことの援助をしてやるのである。

9才以後の子どもは、「見る」ことに「考察する」を含めることができるようになる。これはすでに述べた表象像＝記憶の成立を別の言葉で表現したにすぎない。この時期の子どもはまだ、表象像の成立＝具象的理解を、自身の活動において創造しているのだという明白な自覚はない。目にする対象に応じて、即して、(引きづられてと言ってもよい)、表象像が成立してしまうのである。しかし、年令が進む中で次第に、像はひとりでに成立するのではなく、自身が成立させていることが理解できる。「考察」は子どもが見るところの対象（外界）から、その対象を見ている自身にまで高まるものとなる。これは高度な思考である。9才頃ではそうした自我像が、対象に対する表象像とは異なるものとして、独立することをはじめるのである。アイデンティティーが自身の責任として問われるのはこれ以後である。この時期に自分史の新しい頁が開くのである。

この時期以後、子どもは「外」にある誘惑を知る。誘惑が近づくことも知る。自身はどうするかを自我の力で解決しないといけない。子どもは次第に、実念論者から現実主義的な唯物論者になりはじめる。まだファンタジーや相貌的理解は続いているが、それまでとは異なる現実主義的な思考や判断が強くなる。子どもの眠りと目覚めも、幼児期のそれとは異なってくる。9才以後の子どもでは、目覚めた昼の生活が確立してくる。幼児のように昼の生活に眠りが進入することはなくなる。自我による対象意識の成立は、昼の生活＝目覚めの世界の出来事であり、夜の眠りではそれは消える。そのことが理解できるようになる。自我は大人のそれと等しく、目覚めている間の体験の主催者となる。幼児に共働していた超感覚的な高次の存在者たちは、次第に、その作用を眠りの間に限定するようになる。高次の存在者たちの働きは、子どもの目覚めと共に、意識の深みに沈められる。そうして大人の眠りと目覚めが成立するのである。

Ⅲ　大人の眠りと目覚め

◦天使たち（本来的自我）との出会い

学童期からいきなり大人に移るのは問題である。学童期と言っても、ルビコン川を渡る9才を見ただけである。シュタイナー教育では12才頃に現れる新しい現象に注目するし、14才頃からはじまる青年期がある。それらにおける諸問題を全て飛躍しての設問は、あまりに包括的である。しかし、以下では大人における眠りの世界がシュタイナー人智学ではどのように説明されているかを整理する。9才以後の子どもは、自立する自我によって大人の眠りを営むようになるからである。

眠りの世界そのものが幼児と大人で相違するのではない。しかし、眠りに対する関わり方は、幼児と大人では異なる。これは「はじめに」で指摘したように、眠りの世界（超感

覚的な高次世界＝霊的存在者の世界）への関わり方が異なるということである。この異なりは、ひとえに「自我」の成立と活動、自己意識とその意識からの行為、による。シュタイナー人智学では、地上の生活を過ごす大人は、生まれ出た霊的世界に何を持ち返るかを人間の使命として重要視する。この持ち返りを達成するために、「自身」の使命を意識化する（目覚める）過程がシュタイナー教育であると言うこともできる。大きく見れば、このように死後との関係で位置づけられる教育も、小さく見れば毎日の夜の眠りとの関係となる。幼児は目覚めの生活においても眠っているのであるから、霊的世界に持ち返るものを問われることはない。しかし自我が目覚めた大人では、その自我によって何を意識し、何をしたのかが問われることになる。だから大人の眠りは、日々、死後の生活を予行演習しているということになる。

しかしそもそも、眠りの世界（超感覚的な高次の世界）とは、一体どのように理解したらよいのであろうか。これは精神（霊）をどう理解するのかという問題でもある。これまでにすでにその語を使用してきた超感覚的なるもの（霊）とは、一体、何であるのか。

キリスト教世界に伝統的であった用語を使用すれば、シュタイナー人智学で言う「霊」とは、諸々の天使たちである。言わゆるエンゲル（エンゲロイ）、エルツエンゲル（アルヒアンゲロイ）、ウアゲビンネ（アルヒャイ）などと呼ばれた天使たちである。だから「霊」の内実は単数と言うよりも複数である。そういう言い方は誤解も生じやすいが、「霊」は単なる一者ではないことを表現しておきたい。天使などと言うと、多くの人々はもはやお伽噺の話の住人としか思わないであろう。この天使たちが現に実在していて、私達は眠りの中で、夜毎に出会っていると言えば、正常な相手をしてもらえるであろうか。キリスト教世界で自明であったこうした理解は、今日のように人間の主体的自我意識が強化されてきた時代では、理解されにくいものになっている。むしろ、過去にそうした名前で呼んできたものを人間の本性に内在する機能と説明する方が受け入れられやすい。今日では超越論よりも内在論の方が好まれる。しかし、シュタイナー人智学では、霊は、内在する機能として体験可能であるとされる一方で、その体験のためには「新しい意識状態」が生じなければならないとされ、人間の通常の意識からは遠ざけられている。通常の意識にとって、霊界とは意識できない眠りの世界なのである。シュタイナー人智学でいう意識覚醒の方法をここで取り上げることはできないが、それは私達の通常の意識における眠りが目覚めること、言わば「眠り」に気付くことである。この気付きを出発点として、到達しようとするのは「眠りの中で目覚めること」、つまり新しい意識によってそれまでの眠りが隅々まで照明されることである。

シュタイナー人智学では、天使たちは高次の世界に実在するとする。この天使たちにはヒエラルキーがあり、現在の私達と特に関係が深いのはエンゲル（個人の守護霊・天使）とエルツエンゲル（民族の守護霊・大天使）である。人間は眠りにおいて、この二柱の天使たちと出会い、融合して、地上に生まれた使命を確認するとする。人間の目覚めにあっては、この天使たちは眠れる意志の根底にあって自我に本来的なるものを促し続けている。私達がどんなに熟慮をめぐらしてもなお、さらなる不明さのあることを覚えるのは、自我の根底にあるところの眠れる本来的な自我の促しによるためなのであるが、この眠れる本来的な自我の実体とは上の天使たちに他ならないとするのである。今、使用した「本来的な自我」という用語の方が、「天使たち」の用語よりもわかりやすい人は、すでに内在論を選択しているということである。

確かにシュタイナー人智学での「天使たち」には超越的性格が強い。これはシュタイナー

が西洋の伝統をふまえる人々の理解を考慮したためであろう。しかし超感覚的な霊（天使たち）が文字通り「超」感覚的であるならば、そして感覚を私達の五官に限定するならば、霊（天使たち）はやはり「ない」のである。感覚的に経験できないものを「ある」とすることは、目覚めつつある「新しい意識」の承認を含めて、眠りにおける内在的な体験を承認しないといけない。超越論と内在論は二者択一ではないのだ。

◦天使たちと人間の霊的構成要因（霊我・生命霊）

天使たちを上では「本来的な自我」とも呼んだ。言葉を少し変えて「高次の自我」と言ってもよい。クラーニヒは、エンゲロイ（天使）がシュタイナー人智学で言う「霊我」と対応し、エルツエンゲル（大天使）が「生命霊」と対応すると理解している。[④, ⑤]

「霊我」や「生命霊」は「霊人」と共に、人智学で言う人間の本質構成要因の霊的部分である。シュタイナーは人間の本質構成要因について叙述した著作「神智学」において、霊的部分の説明を他の構成要因のようには説明していない。削除している。人間の最高・最良の心性である「意識魂」を発達させると、それは悟るとしながらも内実は語らない。[⑨]（語れなかったと言うべきかも知れない。「新しい意識」が生じる以前の人々に、言葉で理解させることはむづかしいからである。）そのため「神智学」の読者は、自我により改変された（純化され浄化された）「アストラル体」が「霊我」であり、自我により改変された「エーテル体」が「生命霊」であるとの指摘を、いくら考えても、言葉の整理以上のものはわからない。人間の本質をなす霊的な構成要因については不明のままなのである。ところがクラーニヒは、眠りの世界を取り上げて、そうした人間本性の霊的部分は、眠りにおいて人間が出会うもの、あるいは眠りにおいて人間がそれを生きるもの、であると指摘してくれている。[④, S. 35～, ⑤, S. 59～] この指摘は筆者には救いであった。（シュタイナー人智学で言う超感覚的な高次存在が身近に思えたからである。筆者にとって霊我や生命霊は、天使や大天使も同じであるが、確かに、今なお見えないし、それと指示することはできない。しかし自身の経験において「あたり」をつけることができるようになれた。）

天使や大天使は、人間的主体である自我を超えるものでありながら、この自我に話しかけ、この自我に力を貸すものなのである。恩寵的なこの理解は超越論的な表現である。しかし、天使や大天使は天才と呼ばれる人間にのみ力を貸すのではない。全ての人に対して作用しているのである。全ての人は眠りの中でそれと一つであるからだ。シュタイナー人智学で霊我（マナス）、生命霊（ブッデイ）と呼ばれるものも、眠りにおいて各人に内在し、現実に作用している実体に他ならない。例えば、霊我は真・美・善・聖に対する意識として、生命霊は愛への衝動として、地上の私達の自我の奥に内在している。眠りの中で繰り返し確認される「本来的自我」は、エゴイズムを克服するものに向けて私達を促し続けている当のものである。この観点で言えば、シュタイナー教育はエゴイズムの克服を実現しようとする試みであると言うこともできる。[③] シュタイナー教育は、眠りにおける高次の存在たちの力によって、目覚めにおける意識と行為を純化・浄化し、人間の名前に値する人生を歩む援助をしようとするのである。

大人の眠りは、地上での生活を営んだ自我の点検活動である。点検して本来的な自我に修正する体験である。大人はそうした倫理的要請を、誰からも強要されることなく、自身において経験していく。それでは生涯の終わる頃には、全ての人間が善人に成り切っているかのようであるが、現実は違うぞと言われるかも知れない。これはシュタイナー人智学で言うカルマの問題と関係することである。カルマを理解するには時間的に長い視点で考えるとわかりやすい。個人を離れて、人類の歴史を長い目で見てみると、人類は確実に人

間化する道を進めている。それと同様で、個人の一生はそれより短い期間なのであるが、一生が終わる頃には、この地上での生の教訓を蓄積している。その教訓を持って霊界に返るのである。そして死という長い眠りの後に、再び誕生（受肉）して、前の人生を続ける。この眠りと目覚めのサイクルの中で、個人は確実に「本来的な自我」を実現していくのである。今、現在の大人が全員、善人になっていないことは、眠りにおける自我の点検活動を否定することにはならない。今日、流行しつつある「自分史」の探究は、眠りにおける天使たちが、人々の目覚めの意識の中にも作用しつつあるためと解釈することができる。個人は、自身において、自身の生を根拠づけることを、眠りの中で促され続けているのである。

眠りにおける体験内容を意識化することは、すでに述べたように、現在の意識状態には眠りでしかないものに目覚める、つまり「新しい意識」が生じることである。クラーニヒの人智学解釈によると、それは、人間を越えるものとされてきた高次存在のヒエラルキーとの関係を意識化することであり、同時に人間に本来的な自我を意識化することなのである。そしてそれは、更に、個人が地上に誕生してきた理由を意識化することにもなっていく。以下に見るクラーニヒの説明は、シュタイナー人智学を忠実に理解しようとするものであると言えよう。筆者としては、内在論的視点が今ひとつ明白でないようにも思うが、中部ヨーロッパ圏で理解されている人智学の様子を知ることもできると考えて要約することにした。

◦高次の思考・霊我・エンゲロイ

クラーニヒは超感覚的な高次の霊的存在たちを理解しようとして、そのための方法を、まず人間の思考＝認識に求める。世界（宇宙）のあらゆる事象や現象に向かい、それらを解明しないではおれない思考である。この思考は、事象や現象の本質を概念として把握しようとする。本質という感覚的形態にとらわれないものを把握する思考（自由な内的活動としての思考）は、例えば数学である。数学での思考は純粋で厳格な人間の内的生産活動である。感覚に拘束されないから「高次の思考」と言うこともできる。しかしクラーニヒによれば、数学は「高次の思考」のはじまりであるにすぎない。

高次のものである純粋思考は数学以外の領域でも発達させることができる。シュタイナーがよく引用するゲーテの新しい知覚がそれである。今日に至るまでゲーテの新しい知覚は正当な評価を受けていない。しかしそこにはシュタイナー人智学への入口がある。ゲーテは植物を観察するなかで、「原植物」を発見した。ゲーテの「観察」は同時に「創造」となったためである。シュタイナーはひかえめに「追創造（Nachschaffen）」の語を使用するけれども、ゲーテにおける植物の観察は対象を外的にながめることに留まるものではなく、対象を見ることが同時に対象の本質の直観（創造）となったのである。見ることは、見られるものを、見られるものの本質に即して「追創造」することになるのである。ドイツ語のAnschauungには二つの意味がある。単なる外的な観察と内的な創造行為である直観とである。だからまぎらわしいのであるが、「観察」には、本質に入りこむ→本質を創造するという意味での「直観」も作用しているのである。この「直観」が強く生きている時の植物観察では、例えばゲーテのように、植物を見ることが同時に、見られる植物の本質を追創造するということになる。ゲーテが見た「原植物」は、シラーによって「理念」であると呼ばれたが、ゲーテはそれに応じて、それならば自分は可視的現象の中に君の語る「理念」を見ることができると応じたのである。ゲーテには肉眼では見えない植物の理念＝原植物が見えたのである。だからゲーテからはじまる新しい植物形態学には、数学に

見られる「高次の思考」が作用していると言ってよい。クラーニヒは、こうした「高次の思考」によることで、高次の霊的存在たちも解明できるとするのである。

このように、「高次の思考」は、例えば植物の理念（生きた本質）を見るものである。ところが、この見ることは同時に創造することであるから、植物の観察は同時に植物の創造でもあるということになる。短絡すると誤解を生じやすいが、植物に対する本質直観は同時にその植物の成長を実現するのである。観察は創造活動なのである。これが創造的ということの核心である。人間が植物の理念を把握するとは、その理念が現実となる過程を共に歩む（創造する）ことに他ならない。だから、植物の本質直観はその植物の成長を援助する力と不可分である。これは、見つめるだけで茎を伸ばすことができるような関係ではない。植物に愛情を注ぐ農夫は、植物の様子を察知できるという、ごく平明な事実に現れているものを言う。

「高次の思考」は、私達が「思考」という語で理解している静的な（傍観者的と言える）現象の観察ではない。対象の理念を捉え、その理念の実現に関与していく能動的な創造行為である。そして、「高次の思考」が可能となる時、実はすでに、超感覚的な霊的存在たちの働きと融合しているのである。この霊的存在者たちは、人間が理念を捉えて実現しようとする働きに現れて、その働きを援助しているからである。

今日ではgeistigの語は、ほとんどがその指示内容の不明な「精神的」と訳されている。主知主義的な今日の風潮では、精神的は「知的」と同義である。こうして知性の働きにされればされるほど（もちろんそこでも創造性は発揮されるけれども）、霊性と結びついた理性は知性と同一視されていく。しかしgeistigには「知的」に解消できない広がりがある。「霊的」という語で正体の不明な怪しい仮象を復活させることは誤りであるが、geistigには現在の人間の知性で解明しきれないものも含まれている。geistigは生けるものであり、創造の源でありながら、今の人間にあっては眠りにおいてあるものである。「精神的」の語にそうした意味が含まれるならば、この語を使用することでかまわないが、人々が口にしたり新聞などで使用されている例を見ていると、実在する「精神＝霊」に対する思いを含めている例はほとんどない。もっと軽く、もっと気分的に、事象や雰囲気のエッセンスというほどの意味で使用されている。しかしシュタイナー人智学では、この語はこれまで繰り返したように、確かに実在する高次のものを指示する用語である。筆者は一応「霊的」とする。

「高次の思考」は「霊的」なのである。「高次の思考」によって、霊的世界の秩序や作用を理解することができるのである。天使たちのヒエラルキーとその特性はこの思考によって語り伝えられてきた。そして、シュタイナー人智学で「霊我」と呼ばれるものは、この高次の思考をする主体なのである。「高次の思考」そのものであると言ってもよい。「霊我」は思考を純化し・浄化していくことで誕生する。（感覚的なものにとらわれない「高次」の思考は、私達が「意識魂」を強化することで到達できる新しい意識である。超感覚的な世界に入る道は、この「高次の思考」による認識の道しかないと言ってもよいほど、思考＝認識による新しい意識成立の過程は重要である。（シュタイナー人智学の哲学的代表作品と言われる「自由の哲学」を参照されたい。昨今の世間で問題となっているいわゆる「超能力」が安易な方法で手に入るとするのは誤りである。薬物を使用して仮象体験を得ようとするのはさらに大きな誤りである。超能力を得ようとすれば例えば数学を徹底して学ぶべきであり、あるいはゲーテの認識方法を学ぶべきなのである。思考による明白な自己把握の努力を欠落させると、幻覚・幻聴と現実の境界が融解し、健全な自我が解体すること

になりかねない。)

原植物を発見したゲーテの直観には「霊我」が現れていると言ってよい。しかしシュタイナーによればこの「霊我」はまだはじまりであるにすぎない。ゲーテの直観は、「霊我」の創造性を、植物の外的形式において、(植物に即して、だから拘束されて)追創造しているにすぎないからである。それでも、ゲーテのこの「追創造」は重要である。この外的な現象形態に即することから安易に離れると、オカルト世界の迷路にすぐに陥るからである。現象における理念の現れを知覚する思考であるところの「霊我」のはじまりを、充分に意識化できるようにならなければならない。この段階を踏まえた後に、外的な現象形態から離れることができるのである。外的な形態や形式から離れて、純粋に超感覚的な世界で創造する霊性として、本来の「霊我」の世界ははじまる。これはゲーテの直観を越えるものであり、言わば宇宙を創造する法則と一つになるまでの霊我である。この霊我は、シュタイナーが「アカシヤ年代期」や「神秘学概論」で述べた宇宙の創造秩序に参入できるものである。(②, ①)

「高次の思考」である「霊我」によると、私達が科学的真理とみなしているものは、言わば昼の目覚めの世界における一面的な真理である。昼の真理に対して、言わば夜の世界の真理(眠りの世界にある真理)が今ひとつある。霊我は後者の真理をも捉えることができるのである。この後者の真理は宇宙を創造する法則と一つであるような真理である。だから無尽蔵に近い内容からなり、これまでに解明されたものはその一部分にすぎない。(こんな文章を書いていると、経験的な実証科学の研究者からは、そうした大言壮語を繰り返すよりも、狭い領域でよいから具体的に有益な知見を一つ提示せよという批難の声が聴こえてくるかのようである。その通りであるが、少し待ってほしい。シュタイナー人智学と教育学には数多い具体的な提案が満ちている。しかるに、その提案は、私達が今日に一般的な理解の枠組に留まる限り、何とも奇妙なままであり続けるのである。シュタイナーの論文一つ、講演一つは、そこに人智学の全体が背景となっている。そうした彼の言質を理解するには、全体と部分を見くらべ、自身の経験を吟味しながら、少しずつ進むことしかできないのが現状なのである。)

「眠りの世界の真理」を生きているのがエンゲロイ(天使)なのである。エンゲロイは「高次の霊我」と言うか、「霊我」をすでに高度に形成している存在の名前である。だからエンゲロイは人間における霊我を助けることもできる。古代より人々は個人を守護する霊的存在がいると素朴に信仰してきた。エンゲロイが個人において共に働く時、地上のものとは思えない光(認識の光=目覚め)が生じるとしたのである。(④, S. 36) 筆者の理解では、そうした超越的性格を薄めて、エンゲロイも霊我も、個人の内に眠っている(だから意識に昇らない)内在的なものと解釈したいのである。それと言うのも、「霊我」は、地上の人間における自我において、たとえその全体ではないとしても「高次の思考」として捉えることができる、つまり「霊我」は現れているからである。この内在的視点をより精確に追究していけば、シュタイナー人智学は人々にもっと理解されやすいものになると考えるのである。しかしそうでありながら、すでに見てきたように、「霊我」そのものは、文字通り霊的なもので超感覚的である。それは感覚する肉体を必要としないし、人間の身体を必要としない存在である。だからエンゲロイとして語り続ける方が適切である側面も確かに有するのである。

◦高次の感情・生命霊・エルツエンゲル

さて、霊的世界では、「霊我」の上に、より上位のヒエラルキーがある。例えば「生命

霊」「霊人」と呼ばれるものである。クラーニヒによれば、「霊我」は人間の思考（認識）と対応し、思考における新しい光として体験される。だから、思考から出発して霊我に到達することができるのである。しかし「生命霊」は「霊我」よりもヒエラルキーが上位である。これは眠りがより深いということであり、それだけ目覚めるのが困難だということである。そのため「生命霊」に到達するには、思考よりもより眠りの深い「感情」で迫らねばならない。(④, S. 37)人間の心性では思考と感情は機械的に分離できない。しかし「感覚にとらわれない高次の思考（純粋思考）」では、感情はほとんど問題にならないものとなっている。数学的思考の背景にも感情は流れているが、この感情はみごとに制禦され、ほとんど中性的（反感も好感も生じない）と感じられるまでになっている。「霊我」に到達するにはこのような思考を獲得することが必要なのであるが、「生命霊」には反感と好感に振れる感情から到達すると言うのである。感情は思考ほどの内的堅固さがない。感情で成立するものは不鮮明であり、流動的である。感情はまさしく、思考以上に深く眠っている。この感情を意識化するには、思考の時より以上に強力な力が必要である。思考を意識化する時の光に加えて、さらに情熱が必要である。私達の日常経験からも思考の切り変えに比較して、感情の切り変えはむずかしい。頭ではわかっていることを感情が納得しないことはよくあることである。「生命霊」を内在論的に言えば、それは純化され浄化されて高貴なものとなった感情である。シュタイナーの言葉で言えば、自我によって「改変されたエーテル体」である。人間の心性には、意識の表面に現れたり消えたりする層の他に、意識の深部にあってその存在を基底音のように響かせているものがある。無意識的な基底の心性である。性格や気質を形成している実体である。この「エーテル体」が、自我の力によって改変されて成立するのが「生命霊」である。この名前は、それが自我の生きている真実の生命状態（だから単なる意識状態ではない）の主催者という意味からであろう。仏教で言う覚者を意味する「ブッデイ」が「生命霊」の別名である。仏教での覚者は、覚醒した意識を通り抜け、人間的生の全体にわたる主体的変革をなしとげた者を意味する。それは、思考レベルを越えて感情レベルからの変革の実現を完成した人と言うことができる。クラーニヒは「生命霊」を生み出す霊界の存在者（「生命霊」として作用する霊界の力）が、エルツエンゲル（大天使）と呼ばれてきたのであるとする。エルツエンゲルは別名をアンゲロイとも言う。

エンゲロイ（霊我）を「高次の思考」と対応させるならば、エルツエンゲル（生命霊）は「高次の感情」である。この「高次の感情」は科学者も体験するが、しかしそれを良く知る人間としては芸術家と宗教家を指摘するのがよいであろう。これらの人々は「高次の感情」のはじまりを知っており、それを作品に残してきた。例えば、芸術家が作品を作る時、彼は自身が創造するものを感情において体験している。言わば体内で実感している現実に形を与えていくのである。作品はこの感情の確認に他ならない。人々が祈りの中で体験するもの、あるいは体験しようとしているものも同種である。芸術作品を作る人や祈る人の中では、実質的に霊的と呼べるものが、その人の感情を満たしている。確かに知的認識も作用している。しかしそうした思考によって全てが解明されているのではない。不明さを宿したまま、しかし思考よりもはるかに強い実感が働いており、この感情は現実なのである。この現実は言葉で語り尽くせないほどに美しく、すばらしく、畏敬に満ちており、深い満足や充実を生じる。そして、さらなる何かへの促しを呼びかける。この感情に包まれる人は、満ち足りているのに何かが不満なのである。不満というより、自身の不完全さを認めると言うべきであるかも知れない。感動・充実・畏敬……。古代から人々は、そう

した感情は自身の中に自我を超えるものが貫くのであると理解してきた。インスピレーションである。霊が入り込むという自我にとっての至上の瞬間に、人間は過去から未来に流れる単なる時間を超えたと感じた。地上の時間ではない別の時間が開示されたのである。それは瞬間において永遠を生きると言える体験である。霊と共にある時間、霊が作用している時間、これが「高次の感情」状態である。(「高次の思考」が霊の働きを空間的に、像として捉えると言えるならば、「高次の感情」は霊の働きを時間的に表現すると言えるであろう。)「生命霊」とはこのような「高次の感情」を生じる実体である。

しかし、「霊我」や「生命霊」についてのシュタイナーの言及は、次のように慎ましいものであることを確認しておきたい。「皆さんが思考を高めて永遠の理解にまで到達する時、皆さんはマナス（霊我）の中で生きます。皆さんが感情や感覚を、永遠なるものの性格にまで高める時、皆さんはブッディ（生命霊）の中に生きます。」(⑨. S. 143)

おわりに

大人は眠りの中でエンゲロイ（天使）やエルツエンゲル（大天使）と出会っているのである。今日このような表現を使用すると実に奇妙なのであるが、シュタイナー人智学ではそうなのである。幼児も眠りの中ではそれらに出会っている。そして幼児はその出会いの内容の一端を、昼の目覚めの生活において示してくれるのである。大人は幼児のひたむきな熱心さ、没入、模倣、素直さ……から「偉大さ」と呼べるものを感じとるのであるが、それは実は、自身の眠りにおいて、そのような生き方を確認し続けているからである。大人の場合、目覚めと共に無意識の深みに入れてしまう内実を、幼児は示すことができるから、大人は幼児に触発されるのである。

大人は目覚めと同時に、昨日から続くしがらみの中に入り込んでしまうかのようである。眠りの世界での体験を忘れてしまうかのようである。しかしそうではない。眠りにおける体験は目覚めの生活においても、確かな促しとして働き続けているのである。新しくはじまる一日は、昨日とは「何か」が異なるものとなっている。それは眠りの間を共に生きた高次の霊的存在者たちから、昨日の自我について点検を受け、修正されたためである。人間の自我は、毎朝新しく、高次の霊的存在者たちに応じようとする決意をもって目覚めるのである。これは本来的な自我を実現しようとする促しであると言ってよい。人間は経験を重ねる中で、「自分史」を確認したくなる存在なのである。だから、年令と共に、より本来的な自我に近づいていく。自分の人生には何一つ良いことはなかったと言う人でさえ、表面には見えない深い層では、成長している。不幸や悲劇としてしか解釈できなかったものが、その表面の裏に深い必然性を秘めていたことを確認できるのである。シュタイナー人智学には偶然はない。カルマの論までもち出せば、全ては自身の心底におけると言うか、眠りにおいて、確認し続けた自我活動の成果である。

眠りは重要である。今年の7月2日に山口市南総合センターでもたれたウテ・クレーマーの講演を想起することで小論を閉じたい。彼女の年令は筆者とあまり差はなかった。しかし彼女はシュタイナー人智学を学び、それを生きるなかでブラジルのファベーラ（貧民街）に一人で病院や学校を作りあげた人物である。(⑫.) もの静かな印象を与える、少しやせた女性のどこにそんな力があるかといぶかしく思い、筆者は質問した。「あなたの活力はどこからくるのですか、また人間関係の対立やもつれはなかったのですか」と。ウテさんの解答は大要、次のようであった。……人間は誰でも、眠りの中で高次の存在たちと出会っ

ています。眠りにおいて全ての人は高次の存在になり、言わば一つなのです。だから対立やもつれが生じても眠りの世界では、全ての人は和解しているのです。……翌日、昨日対立した人に会った時、はじめてその人に出会うような気持ちで接することができるならば、対立がこじれるということはないはずです。そして、そのことは誰でもできることだし、実行していることです。人を決めつけてしまうのでなく、外からは見えない「霊的な核」を見えるように練習するのです。よくよく観察するのです。いままでその人に対して抱いていたイメージに囚われないで、全てを、あらためてじっくりと観察します。……毎回、その人に接する時に少しずつ、その人への理解を新たな気持ちで深めていくのです。人間は「霊的な核」を持っていて、眠りの中ではそれを発達させています。だから昼の生活においても、その核に近づこうとすれば和解し合うことができるのです……。

眠りには不思議な蘇生と和解の力が秘められていると語ったのである。

参考文献

①小安美智子：「ミュンヘンの中学生」，朝日新聞社，1985

②Steiner,R：「Die Geheimwissenschaft im Umriß」，Dornach,1989
高橋厳訳「神秘学概論」イザラ書房，1992

③Steiner,R：「Allgemeine Menschenkunde als Grundlage der Pädagogik」，Dornach,1980
高橋厳訳「教育の基礎としての一般人間学」，筑摩書房，1989

④Kranich,E.M.：「Der Rhythmus von Schlafen und Wachen」，Stuttgart,1992

⑤Kranich,E.M.：「Die Bedeutung des Rhythmus in der Erziehung」，Stuttgart,1992

⑥Spitteler,C.：「Meine frühesten Erlebnisse」，Zurich,1988

⑦Steiner,R：「Die Erziehung des Kindes」，Dornach,1988
新田義之／大西その子訳「精神科学の立場から見た子どもの教育」，人智学出版社，1980

⑧松井まり子：「７才までは夢の中」，学陽書房，1994

⑨Steiner,R：「Theosophie」，Dornach,1987.
高橋厳訳「神智学」，イザラ書房，1990.

⑩Müller-Wiedemann,H.：「Mitte der Kindheit」，Stuttgart,1989

⑪Steiner,R：「Aus der Akasha-Chronik」，Dornach,1986
高橋厳訳「アカシャ年代記より」，国書刊行会，昭和59年

⑫小貫大輔：「耳をすまして聴いてごらん」 ほんの木（注文による通信販売）1990